大学文書館へ行こう

第8回「佐藤昌介の書の変わり種」

北海道大学大学文書館　井上　高聡

「高砂」の屏風（佐藤一男氏寄贈、大学文書館蔵）

定番ウェディングソング

今どきの定番ウェディングソングにはどんな曲があるのでしょう。私が思い浮かべるのは、「てんとう虫のサンバ」であったり「乾杯」であったりしますが、随分と古い感覚なのでしょう。さてまた、私よりもずっと上の世代には、ウェディング（婚礼）と言えばもうこれ以外にはないというお約束の曲があります。「高砂」です。

「高砂」は、一四世紀に世阿弥が作り上げた能の演目です。旅をする神主の一行が播磨国の高砂の浦に着くと、老夫婦が現われます。高砂の松と、対岸の摂津国の住吉の松が「相生（あいおい）の松」であり、自分たちはその化身であると告げます。一行が舟で住吉に着くと、住吉明神が現われ、世の平安を言祝（ことほ）ぐ舞いを披露するという、おめでたい筋立てです。

常緑の松は長寿を象徴し、「相生」（共に生きる）は「相老い」（共に老いる）にも通じ、夫婦の睦まじさや長寿のめでたさを表現しています。そのため、「高砂」の謡（うた）いの一節が、婚礼の席の余興などで披露されてきました。特に「高砂や／この浦舟に帆をあげて」に始まる一節は、婚礼を象徴する、知らない者のいないほど有名な曲でした。さすがに結婚式の形態が大きく変わった昨今は、あまり披露される機会はなくなりましたが、時代劇の婚礼の場面などで見掛けることがあります。また、落語「高砂や」の題材にもなっています。

お堅い佐藤昌介

先日、佐藤昌介の書の寄贈を受けました。六扇一双（六枚一組）の屏風が三点、扁額が二点です。屏風は、「高砂」の謡いの内、「所は高砂の／尾上の松も年ふりて」に始まる、松の老木の長寿を言祝ぐくだりを書いたものが一点、先ほど触れた「高砂や／この浦舟に帆をあげて」に始まるものが一点、「君が代」を写したものが一点です。扁額は、一九三八年に書いた「克忠克孝」と、一九三一年に書いた「勤倹治産」です。

珍しい笑顔の佐藤昌介（1930年代、大学文書館蔵）

佐藤昌介は札幌農学校の第一期生です。卒業後は札幌農学校教授・校長となり、大学昇格後には学長・総長を務めた人物です。盛岡藩士の家に生まれた佐藤は、藩校などで武士の由緒正しい教育を受けました。教養として漢文を解し、漢詩を作り、書を嗜（たしな）む。佐藤は当時の典型的な知識人であったと言えます。佐藤は知人に頼まれて書を書いて進呈することが多く、大学文書館もそうした佐藤の書作品を掛け軸や扁額に仕立てたものを多く所蔵しています。書いている内容は、中国の古典の一節や自作の漢詩などが多く、当然、すべて漢字です。先にあげた寄贈資料で言えば、「勤倹治産」、「克忠克孝」のような具合です。

柔和な表情

ところが、「高砂」や「君が代」の屏風はひらがなを交えた書です。一方、漢字だけで書いた「克忠克孝」は「克く忠に克く孝に」、「勤倹治産」は「勤倹産を治め」と読み下すことができ、それぞれ、戦前に天皇が道徳を解いた「教育勅語」、「戊申詔書」の一節を漢文訳したものと考えられます。佐藤の書作品としては、ひらがな混じりは異例であり、「高砂」、「君が代」、「教育勅語」、「戊申詔書」といった題材も珍しいものです。

これらの書は佐藤昌介が夕張郡角田村（現在の栗山町）で農業を営む赤澤熊太郎に進呈したものです。教え子などに進呈した厳めしい漢字羅列の書より、誰にでも読めるひらがなを交えたものの方がふさわしいと考えたのかも知れません。題材とした「高砂」は、前述のように当時の定番ウェディングソングです。「君が代」、「教育勅語」、「戊申詔書」は小学校で必ず習います。いずれも誰もが知っている章句です。お高くとまった漢文・漢詩などより、遙かに身近で親しみのあるものでした。

今回紹介した寄贈資料は、佐藤昌介の柔和な表情を感じさせる変わり種と言えます。

「克忠克孝」の扁額（佐藤一男氏寄贈、大学文書館蔵）